琉球大学学術リポジトリ

沖縄県石垣島にみられるフィリピン人ネットワークの態様：カトリック信仰を核に構築されたつながり

メタデータ	言語:
	出版者: 沖縄移民研究センター
	公開日: 2018-11-13
	キーワード (Ja): フィリピン人, カトリック, ロザリオ, 教会, 石垣
	キーワード (En):
	作成者: 松田, 良孝, Matsuda, Yoshitaka
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010090

移民研究 第 11 号　2016　55-67

沖縄県石垣島にみられるフィリピン人ネットワークの態様
ーカトリック信仰を核に構築されたつながりー

松 田 良 孝

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．研究の方法
Ⅲ．先行研究
Ⅳ．石垣島在住フィリピン人の推移
Ⅴ．カトリックとロザリオ
Ⅵ．信仰と同じ出身国の者同士の集い
Ⅶ．結びに代えて

キーワード：フィリピン人，カトリック，ロザリオ，教会，石垣

Ⅰ．はじめに

石垣島北部の伊原間地区で，フィリピン出身の女性たちが豚の丸焼きを作るのを見る機会があった。重さ約 30 キロの豚の腹腔にレモングラスなどの薬味を詰め込み，民家の裏庭で薪の火で焼き上げる。できあがるまでに要した時間は 5 時間 45 分。木の棒にくくり付けられた豚が火にあぶられながら回転している様子を見ていると，炎の熱気と最高気温 31.9 度の夏空とでどうにかなってしまいそうだった。

2014 年 7 月，フィリピン女性たちがロザリオと呼ばれるカトリックの儀式を行うのを参与観察しにいったときの，これがその情景である。もちろん，カトリック石垣教会の神父が訪れ，祈りはきちんと行った。そうではあるのだが，この日，ブタの丸焼きを食べる段になって集まったのは確認できただけで約 40 人。一軒の民家にこれだけの人がやってきたのだ。もともとは①石垣島に住むフィリピン人たちが②カトリックの儀式を行う ― ということを目的としたロザリオであるにもかかわらず，フィリピン人の配偶者である日本人の男性やその家族，フィリピン人ではないカトリックの信者も来ていた。

沖縄県石垣市には 45 人のフィリピン人が暮らしており（法務省 2015），その大半が女性のカトリックの信者と考えられ，カトリック石垣教会で行われるミサに参加する姿がみられる。しかし，カトリックに対する信仰があったとしても，賃金労働や子育てに伴う時間的な制約のためにミサに参加できない人もいる。一方，石垣市に住むフィリピン人たちは「ロザリオ」と呼ばれるマリア信仰の集まりを月 1 回行い，カトリック石垣教会でのミサとは異なる形で自らの信仰生活を充足させようとしている。

名称未設定-1　55　　2016/05/11　1:21:06

本稿は，石垣市で暮らすフィリピン人について概観しつつ，その信仰生活を，ロザリオを中心に論述する。さらに，出身国を同じくする者同士が同郷意識を確認する場としてロザリオが機能していることを，ロザリオの参与観察やロザリオに参加しているフィリピン人およびフィリピン人以外の人へのインタビューを通じて明らかにする。

本稿は，駐留米軍が存在しない沖縄の離島地域を調査地とし，母国の人口の約 85％がカトリック教徒と言われるフィリピン人の信仰生活に着目して論述を展開している点で特徴的であり，様々なルーツを持った人々で構成される社会を離島から見据えることによって，多文化共生社会の構築に資するものである。

Ⅱ．研究の方法

筆者は，2011 年 11 月からカトリック石垣教会を通じて石垣島に住むフィリピン人と接触し，インタビュー調査を行ってきた。その後，カトリック石垣教会以外のルートで知り合ったフィリピン人からもインタビューを実施している。研究グループの研究協力者としてインタビュー調査を行った場合は，研究代表者や研究分担者，筆者以外の研究協力者が英語やフィリピン語で行ったインタビューの内容を引用した場合がある。原則として非構造化インタビューとしたが，構造化インタビューで実施したケースもある。

また，石垣市に住むフィリピン人たちが月 1 回行っているマリア信仰の集まり「ロザリオ」には，2013 年 6 月から 2015 年 5 月にかけて，合計 11 回出席し，参与観察を行った。

2014 年 10 月には，フィリピンを訪問した。石垣島在住のフィリピン女性のなかにはレイテ島出身者が 1 人暮らしていることから，同島でその家族と会い，その暮らしぶりを取材した。また，同島とマニラ市内，セブ市内ではカトリック教会に足を運び，信仰の様子を取材した。

Ⅲ．先行研究

戦後の沖縄におけるフィリピン人出身者をテーマにした研究は，沖縄島の米軍基地との関連で論じられてきた。本稿の調査地である石垣市はその行政区域に尖閣諸島を含み，無人島の久場島の 87.4 ヘクタールが米海軍の黄尾嶼射爆撃場として，同じく無人島の大正島の 4.1 ヘクタールが米海軍の赤尾嶼射爆撃場として提供されている（沖縄県知事公室基地対策課 2015：14-15）が，有人地域には米軍への提供施設はなく，沖縄島とは対照的である。

鈴木・玉城は沖縄に住むフィリピン人を分析するに当たり，「沖縄の日本復帰以前に来沖し，その後も定住している人々」をオールドカマー（鈴木・玉城 1996：78），「1980 年代前半から基地歓楽街で働くエンターテイナーとして参入した若いフィリピン女性」を

名称未設定-1　56　　2016/05/11　1:21:06

ニューカマー（鈴木・玉城 1997：260）に区分し，「沖縄のフィリピン人社会について構造化を試み」ている（鈴木・玉城 1996：86）。本稿が分析対象とするフィリピン人の来沖時期は「ニューカマー」と重なっているが，鈴木・玉城はその組織化について「オールドカマーの組織に参加するというよりもニューカマー同士で会話や料理を楽しむといった程度でその維持の機会が少ない」と分析している（鈴木・玉城 1997：233）。また，本稿がその拠り所としているフィリピン人調査は，カトリック教会を入り口として実施したが，鈴木は「日本本土の場合においては，カトリックの教会がフィリピン人労働者同士の交流の場として機能しているが，沖縄の場 (ママ) はそうではない」とし（鈴木・玉城 1997：237），カトリック教会を拠り所としない点がむしろ沖縄に住むフィリピン人の特徴だと言おうとしている。

筆者は本稿において，石垣島のフィリピン女性はカトリック教会を拠り所にして結び付き，「カイビガン」という組織をつくっていることを示すわけだが，同じ沖縄であっても，調査時期[1)]と調査地が違えば，フィリピン人の様相が大きく異なることを示している点で先行研究を相対化するものである。

仲里和花は 2011 年，石垣島に居住する 27 人を含む沖縄のフィリピン女性 132 人から調査を行っており（仲里 2013：47），調査時期と調査対象がともに本稿と近い。しかし，分析の観点は「フィリピン女性と家族・地域社会・母国とのコミュニケーション」にあり，フィリピン人同士の組織化には言及していない。また，調査票をカトリック教会に通うフィリピン女性を通じて配布したり，カトリック教会での参与観察を行ったりしている（仲里 2013：37）ものの，カトリック教会を拠り所としたフィリピン女性たちの結び付きには触れていない。

Ⅳ．石垣島在住フィリピン人の推移

法務省が公表している統計によると，2014 年末現在，石垣市にいる在留外国人は 287 人。国籍別の内訳では，フィリピンが全体の 15.6%に相当する 45 人で最も多い。（法務省 2015）

一方，石垣市が「統計いしがき平成 26 年度（第 37 号）」のなかで「外国人登録国籍別人口」として公表している統計では，石垣市で外国人登録を行っている人は 2014 年末現在，265 人で，国籍別ではフィリピンが 43 人で最も多く，全体の 16.2%を占める。次いで，韓国又は朝鮮（33 人），インドネシア（33 人），台湾（31 人），中国（24 人），米国（21 人）となっている。

年次的な変化は石垣市の「統計いしがき」でたどることができる（グラフ「石垣市におけるフィリピン国籍の外国人登録人口」）。それによると，石垣市内に住むフィリピン人は

名称未設定-1　57　　2016/05/11　1:21:06

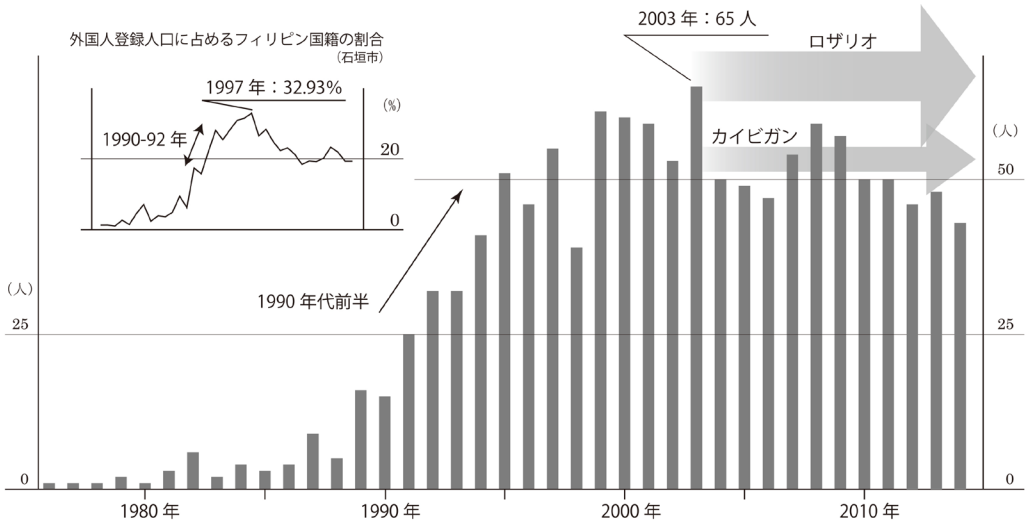

図 1　石垣市におけるフィリピン国籍の外国人登録人口
出典：「統計いしがき」各年度版

1989 年に 16 人となり，初めて二ケタに達した。その後，90 年代前半に急増し，95 年には 51 人。この時期はフィリピン女性が「接客」するいわゆる「フィリピン・パブ」が流行した時期に当たり，この時期に石垣市で暮らしているフィリピン人もほぼ，フィリピン・パブで働くことを目的に興行ビザでエンターテイナーとして来日した女性とみてよい。

2005 年 3 月には，法務省令の改正によって興行ビザの発給審査が厳格化されており，それ以降，全国的には興行ビザで来日するフィリピン人は激減している。「結果的にフィリピン人の若年女性が大量来日する時代はすでに終わった」（高畑・原 2012:163）と指摘され，フィリピン・パブの経営なども困難な状況になっていった。

ただ，石垣市で外国人登録をするフィリピン人は，03 年に 65 人となった後，05 年と 06 年にいったん 40 人台に落ち込んだものの，07 年から 11 年にかけて再び 50 人台に回復し，09 年には 59 人という第 2 のピークを迎えている。そして 12 年からは 40 人台で推移している。

また，性別による内訳を示した悉皆調査の結果は公表されていないが，石垣島に住むフィリピン国籍の男性はカトリック石垣教会の神父などごく少数で，ほぼ全員が女性と考えられる。筆者は 2011 年 11 月から石垣島に住むフィリピン人との接触を開始し，これまでに 20 人を超えるフィリピン人と接触することができた。このうち，男性と接触できたのはカトリック石垣教会の神父 1 人にとどまっている。また，石垣在住フィリピン人たちの話からも，石垣島に住むフィリピン籍の男性はほかにいないものとみられる。

名称未設定-1　58　　2016/05/11　1:21:07

Ⅴ．カトリックとロザリオ

フィリピンは人口の約85％がカトリック教徒と言われ（スタインバーグ 2000：163），石垣島に住むフィリピン人がカトリックを信仰しているであろうことは想像に難くない。実際に，カトリック石垣教会が毎週日曜日に行うミサでは，フィリピン系の人たちが毎回10人前後参加しており，その信仰の篤さは石垣島においても同様である。

本稿では，カトリックに対する考え方について，石垣島に住むフィリピン人に対して行ったインタビューの結果からあらためて探っていくことにする。

石垣島に来て，すぐに教会を探して通うようになったというのはリーダー格の女性2人である。2人は「私こっち来たときに教会，先に探した。（中略）『教会，どこにある？』って旦那さんに，連れて行って[2)]」（I-1），「石垣に来てからすぐ『教会どこにある？』とか探して。お父さん，あ，旦那さんね。すぐ一緒に探してもらったかな[3)]」（I-3）とそれぞれ述べており，いずれも，石垣島に来て早々に，夫に依頼してカトリック教会を探している。

信仰を実践するに当たり，日本語が障壁になりうることを考慮してみた場合にはどうだろうか。リーダー格のI-1は，カトリック石垣教会においてミサを日本語だけでなく，英語でも行うようにした経緯について「そうですね。やっぱり言葉がね。日本語。日本語のミサに来ても，あまり意味もわからなくて，英語のミサを作ったんですよ[4)]」と述べており，信仰心があってもミサで使われる言葉の意味を理解できなければ，教会に来ないようになりうると考えている。

その一方で，現在はほぼ毎週日曜日にミサに参加しているI-8の場合，2000年に結婚した後，当時は日本語だけで行っていた日曜日のミサに参加していた。日本語には次第に慣れていき，現在は聖書の読み手を日本語で担当することもある。I-8は本稿執筆時点で，ほぼ毎週日曜日にカトリック石垣教会のミサに出席するフィリピン人の一人であり，熱心なカトリック信者の一人と考えていいだろう。

また，教会にもロザリオにもほとんど姿を見せないが，カトリック信仰を持っているケースとしては，I-9が挙げられる。I-9は石垣島の最北端に位置する集落に暮らしており，自動車の運転免許を持っていないため，カトリック教会が所在する石垣島南部の市街地へ来るには公共交通機関の路線バスを使用することになるが，カトリック石垣教会でミサが始まる午前9時には間に合わない[5)]。「カトリックだけど，運転できないから。朝，バスがないんですよ[6)]」というのである。リーダー格のI-1が約10キロ離れた集落に住み，自動車で教会に連れていってくれることもあるが，I-9としては「教会に行かなくても，ずっと心のなかにいますよ（筆者註：イエスキリストや聖母マリアが自分の心の中にいるという信仰上の言い回し）[7)]」と，自らの信仰をゆるぎのないものと自認している。自宅玄関

名称未設定-1　59　　2016/05/11　1:21:07

にはマリア像を祀っているほか，居室の一つには，ロザリオ（数珠）を飾るなどしている。

I-6 は，教会の活動やロザリオに参加はしていないが，時期は不明ながら，かつては自宅をほかのフィリピン人とともに祈りを行うための場として提供したことがある。家庭祭壇も持っている[8)]。

以上のように，教会で行われるミサやロザリオに参加するかしないかにかかわらず，石垣島に住むフィリピン女性はほぼカトリックに対する信仰が篤いことが分かる。

1. ロザリオの成り立ち

カトリック石垣教会で行われるミサのうち，フィリピン人が参加することが多いのは毎週日曜日の午前 9 時からと，毎月第 4 水曜日の午後 7 時半からのミサである。前者はフィリピン人かフィリピン人以外かを問わず，毎回 50 人前後の信者が出席している。後者は，カトリック石垣教会の神父が英語を解する場合に行われるものであり，カトリック那覇教区の石垣以外の教会から英語を解する神父がやってきて行うこともある。日曜日のミサに比べると開催の継続性は不安定である。カトリック石垣教会では 2013 年 9 月に英語を解するフィリピン人の神父が着任し，本稿執筆中の 2015 年 7 月現在，このフィリピン人の神父が水曜日の英語ミサを行っている。

教会という公共的な空間で行われるカトリック石垣教会のミサは，石垣島に暮らすフィリピン人信者にとって，必ずしも自らの生活リズムに適合したものとはいえない。すでに示しているように，リーダー格の I-1 は「やっぱり言葉がね。日本語。日本語のミサに来ても，あまり意味も分からなくて，英語のミサを作ったんですよ」と指摘したうえで，「でも英語のミサは夜だから，みんな夕ご飯の時間だから，来るのは少なくなって」[9)] と述べている。石垣島でフィリピン人がロザリオをスタートさせるきっかけをつくったフィリピンルーツのシスターも「（日本語のミサだとしても）家庭の事情があってね，仕事から離れない（筆者註：離れられない，の意）とかね」[10)] と話しており，ミサの時間帯に自分の生活リズムを合わせることが困難なケースがあることを指摘している。

本稿で取り上げているロザリオにしても，一定の時間帯に集まるという点では，ミサと変わらない。ミサと異なるのは，出身国を同じくする者同士が参加しているという点である。その様相と分析はⅥ章以降に譲るとして，ここでは石垣島に住むフィリピン人の間でロザリオがどのように始まったかを確認しておこう。

そのためには，石垣島に住むフィリピン人の集まり「カイビガン[11)]」の成り立ちをみておくことが有効だろう。「カイビガン」はカトリック石垣教会の信者会にある 8 つの会のうちのひとつと位置付けられている（カトリック石垣教会信者会 2014：15）。

石垣島に住むフィリピン人たちのリーダー格の I-1 は「フィリピン人が，来る（筆者註:

名称未設定-1　60　　2016/05/11　1:21:07

石垣島に移住してくる，の意）人が多くなって，それでグループ作ったんですよ，このカイビガンのグループを。で，このカイビガンのグループは，何も活動がないから，月 1 回だけ，ロザリオやってます」[12] と述べているように，ロザリオの参加者とカイビガンのメンバーはほぼ重なっている。

カイビガンとロザリオは 2003 年に始まっている。いずれも、フィリピンルーツのシスターがリーダー格の I-1 と I-3 に働きかけてスタートした [13]。

フィリピンルーツのシスターは，2001 年に米国で同時多発テロ（「9・11」）が起き，「平和に危険性」[14]（筆者註:平和に対する危機感）を感じたことから，その祈りとして，フィリピンで各家庭を回る方法で行われているロザリオの信仰を石垣島でも始めようと思い立ったという。

すでに図 1 で示した通り，石垣市内に住むフィリピン国籍者の人数は 2003 年にピークを迎え，その後，緩やかに減少する傾向がみられる。カイビガンとロザリオの成立時期は結果的に，1990 年代の増加傾向がひと段落し，フィリピン人の人数がピークを迎えたころと重なっている。

2. ロザリオの情景描写

では，ロザリオではどのようなことが行われているのか。筆者がこれまで出席したロザリオを基に，その様子を紹介しよう。

筆者は 2013 年 6 月から 2015 年 3 月までの間に，合計 11 回のロザリオに出席した。いずれも石垣市内に住むフィリピン人の自宅で行われたもので，同一人物の自宅に 2 度赴いたケースが 2 件あるため，ロザリオのために 9 人の自宅を訪れたことになる。また，11 回のうち, 3 回は特別なケースといえる。1 回は誕生日パーティーを兼ねて豚の丸焼きを行い，別の 1 回は自宅の新築祝い，残りの 1 回は自宅に家庭祭壇ができたことへの祈りを兼ねて行っている。これら特別なケース 3 回を除いた 8 回に基づいてロザリオの様子を概観すると，以下の通りである。

ロザリオは午後 1 ～ 2 時を集合時間として行われる。ほとんどの場合，土曜日か日曜日に実施される。出席者の人数は 10 人に満たないこともあるし，30 人を超えることもある。マリア像は前回のロザリオを行ったフィリピン人の自宅に置かれているので，フィリピン人のだれかがその家からマリア像を持ってきて祭壇を設える。聖書の読み手を 5 人ほど決めた後，数珠を手にして，リーダー格の女性かカトリック石垣教会の神父のリードでロザリオが始まる。本稿執筆時点でカトリック石垣教会に赴任しているフィリピン人神父はロザリオに参加することが多く，筆者が出席した 11 回のうち，特別なケースの 3 回では当然のことながらすべて神父がリードし，残り 8 回のうちの 3 回でも神父がリードを行って

名称未設定-1　61　　2016/05/11　1:21:07

いた。

聖書の朗読は 30 分ほどかけて英語で行い，出席者はマリア像を設えた祭壇を取り囲むように座り，手にした数珠を丁寧になでながら，読み手に続いて唱和するなどして祈りを行う。出席するフィリピンの女性は多くがおしゃべりを好むが，祈りの時間には静寂が保たれ，連れてこられた子どもたちが大きな声を上げるなどすると叱責されることも少なくない。

祈りが終わると，自宅を提供した人が調理した料理や参加者が持参した料理を食べながら，語らう時間となる。誕生月の人がいる場合には，ケーキなどが用意されることもある。筆者が出席したロザリオでは，酢を使った肉料理「アドボ」や「ルンピア」（春巻き），大きめの魚を焼いた「イニハウ・ナ・イスダ」や，ココナツミルクで煮たもち米を蒸した「スマン」などを確認している[15)]。

筆者は，石垣島に住むフィリピン人の母語を理解しないが，フィリピン人たち自身が説明するところによると，食事をしながらの会話ではタガログ語やビサヤ語が使われているという。カトリック石垣教会の日本人信者のうち，フィリピン女性と比較的親しい女性が出席することもある。筆者はこれまでに 5 人が出席したことを確認している。5 人はいずれもフィリピン人たちの母語を解さない。また，5 人のうち 1 人は英語で意思疎通することができる。フィリピン人たちは英語を解するが，筆者の参与観察によると，この女性がロザリオの場で英語を使ってフィリピン女性と会話をする場面は確認できなかった。

なお，ロザリオは予定していた開始時刻より 30 分から 1 時間ほど遅れてスタートすることが少なくない。出席者たちの多くは，フィリピンでは決められた時刻が守られないことが多いと認識しており，ロザリオ開始が遅れることを「フィリピンタイム」（フィリピンでお馴染みの，時間に対するルーズさ）と表現して，意に介さないことが多い。単に時間にルーズだからという理由ではなく，家庭や勤務先，自営の仕事の都合などでロザリオの開始時刻に遅れてやってくる人もいる。また，同じ理由から，ほかの出席者が食事を楽しんでいる最中に中座する人もいる。

Ⅵ．信仰と同じ出身国の者同士の集い

石垣島のフィリピン女性が行っているロザリオは、教会とは異なる空間で信仰を実践するという機能とともに，フィリピンという同じ出身国の者同士が集うという機能を併せ持つ。

後者の機能を理解するには，ロザリオに積極的には参加していない I-7 が，筆者らのインタビューに対して次のようにロザリオを批判した点が参考になるだろう。

名称未設定-1　62　　2016/05/11　1:21:07

発言Ａ「だから食べ物だけで，あれはイヤなの。絶対いや。みんな時間でしょ，分かるでしょ？時間早いでしょ，みんな？」

発言Ｂ「何最初に食べようかって。センターはセンターね。センターは神様でしょ[16]」

発言Ａで「時間早い」と言っているのは，祈りの時間が短く，丁寧ではないという意味である。また，発言Ｂでは，ロザリオの「センター」，つまり中心には聖母マリアがいるのに，マリアへの祈りを脇に置いて，食べることのほうを重視しているという見方を示している。筆者はロザリオの在り方を批判するためにこのコメントを引用したわけではない。祈りよりも同じ出身国の者同士で集まることのほうを大切にしているのではないかと思われかねないほどに，フィリピン女性たちがお国の料理をにぎやかに楽しむ姿がロザリオにはあるということである。実際にはリーダー格の I-1 が「ロザリオの時は（中略）私たちの願いは，1 人のフィリピン人が旦那さんが亡くなって，それの，家族を守って下さいとか，そのお祈りやってます。例えばこの人が離婚してるから，この人の生活とか子どもたちを守ってくださいというのを，ロザリオ，一応，お祈りでやってますね[17]」と話すように，真摯な祈りがまず行われ，それから食事に移るのである。

Ⅶ．結びに代えて

平野裕子は「フィリピン人の日本での生活において，社会的に重要な働きをしているのはエスニック・ネットワークである」としたうえで，「各地のカトリック教会の礼拝出席者が中心となって Basic Christian Community（キリスト教基礎共同体）を形成し，非正規滞在者も積極的に活動に参加し，聖書研究やスポーツ大会等を通して親睦を深めている。中には，日本人ボランティアと連携し，労働問題，医療問題等の相談を行うなど，日本での生活のさまざまな面を支える活発な活動を行っている共同体もある」（平野 1997：65）と述べ，カトリック信仰を基盤にしたフィリピン人の組織が多様な機能を担いうることを指摘している。

石垣島のフィリピン女性はロザリオというカトリックの信仰の場を舞台に，同じ国の出身者同士であるという意識を確認しようとしていたのだが，こうした意識や信仰で結びついた石垣島のフィリピン女性のグループが今後どのような機能を持つに至るのか／至らないのかについては課題としたい。調査においては，石垣島のフィリピン女性たちが資金を融通し合う仕組みとして，複数の「模合（もあい）」（「頼母子講」の沖縄での呼び名）が行われているとの語り[18]もあり，フィリピン女性たちのグループが持つ互助的な機能を示唆している。

本稿を閉じるに当たり，フィリピン女性たちのつながりや互助の姿が“外向き”に広がったケースを紹介しておきたい。2013 年 11 月の台風 30 号（現地名「ヨランダ」）によって，

名称未設定-1　63　　2016/05/11　1:21:07

フィリピンがレイテ島タクロバンを中心に甚大な被害を受けたことに対する復興支援の活動である。

台風ヨランダがレイテ島を直撃したのは 2013 年 11 月 8 日。石垣島のフィリピン女性たちはその 8 日後の 11 月 16 日には衣類など支援物資の提供を呼び掛けており，カトリック石垣教会には段ボール箱に入った物資が何箱も集まっていた。支援活動はフィリピン女性のみで行ったわけではなく，カトリック石垣教会の地元信者も物資集めや仕分けなどを行っている。信者ではない石垣島住民がフィリピン女性たちの活動を聞き付けてカトリック石垣教会へ義捐金を持参することもあった（2013 年 11 月 17 日付「八重山毎日新聞」7 面）。信仰によって密接に関わるカトリック石垣教会は支援物資を集積するための物理的な空間を提供し，フィリピン女性たちの活動がフィリピン人以外にも浸透するための手助けを行ったのである。

石垣島にはタクロバン出身のフィリピン女性が 1 人暮らしており，台風ヨランダの被害発生当時から石垣島在住のほかのフィリピン女性が訪問や電話で気遣いの気持ちを示している。2013 年 11 月 23 日のロザリオはこの女性の自宅で行われ，母国の復興へ祈りを捧げている（2013 年 11 月 24 日付「八重山毎日新聞」3 面）。また，この女性の父親は 2014 年 1 月から 2014 年 7 月までこの女性宅に身を寄せており（2014 年 7 月 25 日付「八重山毎日新聞」7 面），フィリピン女性たちはロザリオなどを通じてこの父親をバックアップした。

母国に降りかかった災厄を前に，フィリピン女性たちが支援を求めて機敏に活動できたのは，フィリピン女性たちが普段から互助的な活動を行っていることを示唆しているのではないか。

ところで，石垣島に住むフィリピン人の間では，筆者が調査を開始した 2011 年 11 月以降だけを見ても，女性 2 人が石垣島を離れ，フィリピン人を父に持つ日本国籍の男性 1 人がほかの地域から引っ越してくる現象が起きている。石垣島のフィリピン人社会は 50 人程度の規模でしかなく, 1 人, 2 人といった増減であってもインパクトは少なくない。実際，新たに石垣島にやってきた男性はフィリピ女性の子どもたちを集めてスポーツを行うなどフィリピン女性たちがこれまでに行ってこなかった活動を行っているほか，音楽家という本職を生かして石垣島のフィリピン人たちをこれまでとは異なるルートで地元社会とつなぐ役割を果たしている。また，自宅を「ピノイ・ハウス（フィリピン人の家）」と名付け，フィリピン国旗を掲げるなど，フィリピン色を強く打ち出した場としても石垣島では異彩を放っている。

このように，石垣島に住むフィリピン人のコミュニティは今も変化を続けている。本稿で取り上げた「ロザリオ」の風景もその姿を変えていくかもしれない。折に触れて，フォローしていくこととしたい。

名称未設定-1　64　　2016/05/11　1:21:07

謝辞

本稿の執筆に当たっては，石垣島のフィリピン人のみなさんやカトリック石垣教会のみなさん，フィリピン・レイテ島のみなさんから多大なご支援をいただきました。心より感謝申し上げます。

付記

本稿は平成 25-27 年度科学研究費補助金（基盤研究 (C)）「沖縄・先島地域のトランスナショナルな移動と社会関係ーフィリピン人女性を中心にー」（研究代表者：野入直美　課題番号 25380680）の研究成果である。

注

1）鈴木･玉城（1996, 1997）がフィリピン人に対して実施した面接調査は, オールドカマーに対しては 1994 年 8 月から 1995 年 10 月にかけて（鈴木･玉城 1996:78）, ニューカマーに対しては 1994 年 10 月から 1995 年 9 月までと 1996 年に（鈴木・玉城 1997：240）それぞれ実施しており，筆者が石垣島で調査に着手した 2011 年とは 15 年以上のずれがある。

2）2013 年 8 月 30 日，カトリック石垣教会でインタビュー。

3）2013 年 8 月 30 日，カトリック石垣教会でインタビュー。

4）2013 年 8 月 30 日，カトリック石垣教会でインタビュー。

5）東運輸ホームページ。http://www.cosmos.ne.jp/~bus/time_eastbus.html。2015 年 7 月 2 日閲覧。

6）2014 年 8 月 13 日，石垣市内の自宅でインタビュー。

7）2014 年 8 月 13 日，石垣市内の自宅でインタビュー。

8）本人に対しては 2013 年 11 月 5 日に，夫に対しては 2014 年 5 月 8 日に，いずれも石垣市内の自宅でインタビュー。

9）2013 年 8 月 30 日，カトリック石垣教会でインタビュー。

10）2013 年 10 月 27 日，与那原教会でインタビュー。

11）フィリピン語で「友だち」の意。kaibigan。

12）2013 年 8 月 30 日，カトリック石垣教会でインタビュー。

13）2013 年 10 月 27 日, 与那原教会でフィリピンルーツのシスターからインタビュー。フィリピンルーツのシスターはフィリピン人の父親と沖縄出身の母親との間で，沖縄島中部で出生し，5 歳から大学卒業までの間をフィリピンで過ごしており，フィリピン語で話すことができる。こうしたことから，石垣島に住むフィリピン人とフィリピン語で意思疎通することができ，活動などを行うよう働きかけることが比較的容易だと考えられ

名称未設定-1　65　　2016/05/11　1:21:07

る。沖縄県内では，戦後米軍属として沖縄に来た後に定住したフィリピン人のグループ「FILCOMRI」（Filipino Community in Ryukyu Islands）が 1966 年に発足したことが知られており（高畑 2003：271），有人地域に米軍提供施設がない石垣市はフィリピン人が組織化される時期において対照的な様相を示している。

14）2013 年 10 月 27 日，与那原教会でインタビュー。

15）矢元貴美文・松田良孝写真「フィリピン料理紹介」（「月刊やいま」2014 年 11 月／南山舎）を参照した。

16）いずれも 2013 年 11 月 5 日，カトリック石垣教会でインタビュー。

17）2013 年 8 月 30 日，カトリック石垣教会でインタビュー。

18）I-1 と I-3 からそれぞれ 2013 年 8 月 30 日，カトリック石垣教会でインタビュー。

文献

資料

沖縄県知事公室基地対策課（2015）「沖縄の米軍及び自衛隊基地（統計資料集）」。沖縄県ホームページ。http://www.pref.okinawa.jp/site/chijiko/kichitai/toukeisiryousyu2703.html。2015 年 7 月 20 日閲覧。

カトリック石垣教会信者会（2014）『第 49 回信者総会』石垣：カトリック石垣教会信者会

鈴木規之・玉城里子（1996）「沖縄のフィリピン人 — 定住者としてまた外国人労働者として (1)」琉球大学法文学部編『琉大法学第 57 号』沖縄県西原町：琉球大学法文学部，pp61-88.

鈴木規之・玉城里子（1997）「沖縄のフィリピン人 — 定住者としてまた外国人労働者として (2)」琉球大学法文学部編『琉大法学第 58 号』沖縄県西原町：琉球大学法文学部，pp229-260.

スタインバーグ，デイビッド・ジュエル，堀 芳江ら訳（2000）『フィリピンの歴史・文化・社会 — 単一にして多様な国家』東京：明石書店

高畑 幸（2003）「国際結婚と家族」駒井 洋監修『講座　グローバル化する日本と移民問題　第Ⅱ期　第 4 巻　移民の居住と生活』東京：明石書店，pp255-291.

高畑 幸・原めぐみ（2012）「フィリピン人 —『主婦』となった女性たちのビジネス」樋口直人編『日本のエスニック・ビジネス』京都：世界思想社，pp159-187.

仲里和花（2013）「沖縄県在住フィリピン女性の生活実態調査」日本コミュニケーション学会九州支部編『九州コミュニケーション研究第 11 号』長崎市：日本コミュニケーション学会九州支部，pp31-57.

平野裕子（1997）「フィリピン人」駒井 洋ほか編『新来・定住外国人がわかる事典』東京：明石書店，pp64-65.

名称未設定-1　66　　2016/05/11　1:21:07

統計

法務省（2014）「市区町村別　国籍・地域別　在留外国人」。「政府統計の総合窓口」。http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001133760。2015 年 7 月 7 日閲覧。

石垣市「統計いしがき」各年度版。石垣市役所は 2004 年度版以降をホームページで公開している。石垣市役所ホームページ。2015 年 7 月 7 日閲覧。

新聞

『八重山毎日新聞』2013 年 11 月 17 日，2013 年 11 月 24 日，2014 年 7 月 25 日

（まつだ　よしたか・八重山毎日新聞編集センター）

The State of the Network of Filipinos in Ishigaki, Okinawa: The Relation Built Using Catholic Belief as a Core

MATSUDA Yoshitaka

(A reporter of the editorial department of the YAEYAMA MAINICHI SHIMBUN editorial center)

Key words : Filipinos, Catholic, Rosary, church, Ishigaki

In 2015, 45 Filipinos live in Ishigaki Island in Okinawa, Japan and most of them are female. Many of them are Catholics and attend Sunday mass at Catholic Ishigaki Church every week. The members of the group of Filipinos, "Kaibigan", as one of the eight administration organizations of Catholic Ishigaki Church also engage in the management of the believers' association. They get together at a member's house for the block rosary once a month. At the block rosary, they identify their camaraderie among themselves, people with the same country of origin, through some Philippine foods and the conversations in their own languages after they pray the rosary.

名称未設定-1　67　　2016/05/11　1:21:07